© 1991 ISIJ

特別講演

R & D と Arts & Culture

植　木　　浩*

R & D and A & C

Hiroshi UEKI

ご紹介いただきました植木でございます．ここ大岡山まで来てちょっと思い出したんですが，今もちょっとご紹介がございましたように，私は文部省に入る前に，NHK で，『音楽の泉』とか，西洋音楽の番組担当を3年ばかりしておりました．

法学部出身であったにもかかわらず，NHK のプロデューサーといいますかディレクターになったきっかけというのは，ちょうど東大へ入りまして，個人レッスンで歌を5年ぐらい習っていたことがございます．そのときには長原という，ここからそう遠くないところに先生のお宅がありまして，私は毎週一度，長原に通ってはフランス歌曲を習っていました．ドイツ歌曲もそうですけれども，フランス歌曲もなかなか難しいので最初からは歌わせていただけません．最初は発声法とか呼吸法とか発想法とかそういう訓練ということで，イタリア古典歌曲のほうが特に日本語からは入りやすいということと，それからベル・カントの発声が国際的にも発声の基礎だということで，フランス歌曲を習うのにイタリア歌曲から入っていったわけです．

お弟子さんが入れかわり立ちかわり先生に習っていまして，発表会というのがありました．私が入ってから一番初めの発表会で，要するに私が初めて大勢の人の前で一人で歌を歌ったのがこの東工大の中の講堂でございます．この場所であったかどの場所であったか，ちょっと正確に覚えておりませんけれども，だいたい大きさはこれぐらいの感じで，何百人か—だいたいみんな親戚の人に切符を配ったり友達を呼んできたりで，もちろん買ってくれる人はほとんどいません．私が入ったばかりの新米の弟子だったもんですからトップバッターにさせられました．1曲目が日本歌曲で，『月』というタイトルで小松耕輔先生の作曲だったと思いますが，きれいな曲でした．2曲目がイタリア古典歌曲の『ニーナ』というたいへん有名な歌でございました．非常に緊張して歌いましたけれども，何とか途中でしくじらないで歌って，先生からも「初めてにしちゃ，まあ落ち着いていたよ」と言ってほめられたことを覚えております．

それが今から30数年前のことであります．今度は歌ではなくて，ここでスピーチをするということになりました．先ほど来，拝見しておりますと，私の学術国際局審議官や局長時代にいろいろとご指導いただいた偉い先生ばかりが並んでいらっしゃって，また歌のときと同じように緊張せざるを得ません．多少，文化庁の PR になろうかと思いますけれども，40分ほどお時間をいただきたいと思います．

日本鉄鋼協会75周年ということで，たいへんおめでとうございます．日本は鉄鋼技術，鉄鋼研究の分野で，今や世界のリーディングカントリーになっているわけでございますが，この協会の果たされた貢献にはたいへんなものがあろうかと思います．そういう機会に，直接技術とは関係はございませんけれども，芸術・文化のお話をさせていただくということはたいへん光栄でございます．

最近よく，私の所へもいろいろと外国の方が大勢お見えでございますが，私とたいへん仲よくしておりました OECD の高級職員の方がおります．非常に日本びいきで，今までしょっちゅう日本に来ていました．その人は来るたびに浅草へまず飛んで行って，「ともかく東京で一番いいのは浅草だよ」といっていました．確かにそう言われてみますと，浅草には何かたいへんな日本文化のエッセンスが，あるいは我々にはよく見えないもので，かえってヨーロッパの人には見えるものがあるのかなと思ったりしております．もう7～8年前の話でありますが，その方が，「どうも日本へ行くと，みんなが文化だ，文化だと言っているね」とおっしゃるわけです．そう言われてみると確かにそうだと思いました．「行政機関の官僚も企業の偉い方々も，あるいは学者の方々も，みんなが日本へ行くと，カルチャーだ，カルチャーだと言っている．これは一体何なんだろうか」と．「じゃ，ヨーロッ

平成2年4月3日本会講演大会における日本鉄鋼協会創立75周年記念特別講演　平成2年7月2日受付（Received July 2, 1990）

* 文化庁長官（現：東京国立近代美術館館長）（Commissioner, Agency for Cultural Affairs, Now Director, The National Museum of Modern Art, Tokyo, 3 Kitanomaru Chiyoda-ku, Tokyo 102）

Key words: R & D; culture; civilization; arts; cultural policy; heartware; bioware; homo sentiens; amafessional; A & C (Arts & Culture).

パではどうなんですか」と私が聞きましたら,「いや,ヨーロッパではOECDあたりで仕事をしていると,いかにしてレイバーからワークへ移転をしていくかという状況なのに,日本ではレイバーからワーク,ワークを飛び越してさらにカルチャーへとみんなが言い出しているような気がするんだけど」と.

最近もあるフランスの音楽家の方がたまたま長官室へ参りまして,30分ぐらいお話をしていました.その方は日本に長く滞在して,日本に教え子がたくさんいらっしゃる方でありますが,「芸術という観点から,ヨーロッパなりアメリカなり日本を比較してみると,それぞれすばらしい花が咲いているのでどの国がどうということは言いにくいけれども,もうちょっと範囲を文化,カルチャーというふうに広げてその活動ぶりを見た場合には,最近は日本がとても活発で,はっきり言えば,一番活発だと思うんだけれどもどうだろうか」と逆に質問をされました.「確かに,日本は最近特に,芸術家はもとより,一般の方々も文化活動への参加に非常に熱心になってきて,そう言われてみれば非常にダイナミックな感じがしますね」と言って,いろいろとデータを調べてみました.

確かに,ママさんコーラスなどを入れて合唱で150万人というデータが出ておりますし,吹奏楽も高等学校や中学校の吹奏楽団を中心に80万人—これはそういう協会からのデータをいろいろいただいているわけでございます.美術も単に美術館に行って鑑賞するというだけでなく,実際に自分が日曜画家なり,画架を立てて画いてらっしゃる方が500万人という数字が出ております.書道1000万人,民謡・民舞500万人,茶道600万人,華道300万人と数えていきますとたいへんな数字が出てきます.こういったものを,いわゆる先進国と比較してみると,確かにそのフランス人の方がおっしゃるように,あるいはOEDCの方が「みんなが文化だ,文化だと言っている」と言われているように,日本の文化活動というのは,国民全体を含めた形ではたいへん盛んなものであるという実感でございます.

文化庁は数年前に,私の前任者の大崎さんが長官の時に文化行政白書というのをつくりました.その時に今いろいろと申し上げたような数字も改めて調査したわけですけれども,芸術家の人口というのを国勢調査を基にして調べましたら,10年間でほぼ2倍になっております.デザイナーとか,あるいは音楽家の数が急上昇しております.美術館の入館者数も10年間で倍になっております.あるいは舞台芸術の公演も1.5倍ぐらいになっているとか,舞台芸術のホールも5年間で1.6倍になっているとか,そういう数字が次々と出てきます.多分この辺の国際比較をしたら,日本はかなり上のほうじゃないかと思います.

心理的な面という意味で,総理府の国民生活に関する世論調査が毎年行われておりまして,ものの豊かさを重視するか心の豊かさを重視するかというおもしろい調査を毎年しておられます.昭和50年ですと,ものの豊かさを重視するという方が41.3%,心の豊かさを重視するという方が36.8%.それが昭和51年から53年ぐらいがだいたい40%ぐらいで同じぐらいになりまして数年間動いています.昭和54年に,心の豊かさを重視するという方が40.9%,ものの豊かさを重視するという人が40.3%ということで,もののほうが下がって参りました.それ以来もののほうがずっと下がって,心が上がってきております.たいへん大きな開きで,平成元年では,心の豊かさを重視する人が49.3%,ものの豊かさを重視する人が32.7%というふうになっております.

そのほか総理府の調査では,今後の生活の力点をどこに置くかという時に,レジャーとか,いわゆる余暇とか,そういうものがずっと上昇してきております.その反面,住生活,食生活がしだいに下降しておる.あるいは耐久消費材とか衣生活というものは非常に低いところで横ばいになっています.

そういう感じで,いろいろなデータをとっても,日本は文化の時代になりつつあるということが言えると思います.これはある意味では当然のことで,所得水準が上がり,生活水準が上がり,あるいは教育の程度もみんな高くなり,自由時間が増えてくるということであれば,衣食足って礼節を知るといいますか,衣食足って文化を求めるということは当然だと思います.

ところが,なぜ日本において,特に文化の時代とか文化ということが力説されているかという点は,本当はいろいろと研究者の方に解明をしていただかなければいけない課題だと思いますが,ヨーロッパに行って,「文化の時代という言葉があるか」とフランスの文化省の人に聞きましたら,「いや,フランスではそういう言い方はしてないですね.文化政策が大事だとか,芸術に対する支援が大切だとか,そういうことは言うし,それからバスティーユのオペラ座もつくったり,国立図書館を建てかえる計画があったり,そういう文化の大きな事業というものも着々と進められているけれども,特に文化の時代という日本の言い方を直訳したような言い方はないですね」ということでした.

そうすると,何で日本で文化の時代という言葉が—これは確か大平総理のときに初めて国会で,私もそのとき田園都市構想のブレーンの1人をしておりましたけれども,確かあの頃から文化の時代という言葉がかなり公にも使われ始めたと思います.

私なりの個人的な感想を申し上げますと,最近,江戸時代ブームになりかけているようでありますが,江戸時代というのは私どもの文化庁の文化財保護部の専門家の方に言わせると,たいへんな大衆文化の花盛りの時代で,しかも人がやっているものを見たり聞いたりするという

だけでなく，実際に自分でもやってみるというのが江戸時代の芸能のかなり大きな特色，文化の大きな特色だということであります．

それが明治時代に入りまして，富国強兵，殖産興業，あるいはそういう勢いで，江戸時代の大衆文化というものが少しプライオリティが下がってしまってきたのではないか．大正に入って，その辺を盛り返そうと思って，いわゆる大正文化といいますか，音楽でいうと浅草オペラの時代とかいろいろあったんですけれども，そこで大震災が起こって，そしてまた戦争の時代へと，昭和へと入った．戦後はゼロから再スタートして，経済復興，追いつき追い越せ，そして経済成長．ようやく今，江戸時代への潜在的なノスタルジーといいますか，大衆文化—一人ひとりが，ただ見たり聞いたりするだけではなく，自分もやってみようという大きな動きがここに出てきたのではないか．こんな感じがしてなりません．

私も，先ほどもご紹介ありましたように，文化庁に来る前は学術国際局長ということで，ずいぶんこの中にもいろいろとご指導いただいた先生が多いんですが，例え話というのは余り正確ではありませんから問題があるかもしれませんが，地震のプレートテクトニクス理論と少し似ているのかなという感じがします．経済のほうのプレートがどんどんと広く大きくなり，その重みの下に文化というプレートがだんだん潜り込む．その内にひずみができて，どうにも我慢できなくなって，文化のほうのプレートが上へはね上がる．そこで一種の文化の地震とでもいえるものが日本で起きているのかなと，こんな解釈をいたしております．普通の言葉で言えば，経済的な豊かさというものがある所まできて，これからは心の豊かさも求めようという大きな国民的な流れ，社会的な流れが起こりつつあるということができると思います．

私自身の生活—私も東京に住んでおりましたけれども，終戦後を振り返ってみますと，焼け跡の中でまさに「生存の時代」というのがあったと思います．次は，「生計の時代」といいますか，やっと家計をやりくりした頃．その内にだんだんと品物も増えてきて，レジャーなど生活らしい感じが出てきて，特に耐久消費材などもたくさん出てきた「生活の時代」．ようやく今，物質的な豊かさを踏まえながら心のゆとりができて，今度は「人生の時代」へというふうに動きつつあるという感じがしております．

このような文化の時代というものに対して文化庁はどういう役割を果たすのか．少し話はかたくなりますけれども，せっかくこれだけの方がお集まりですから PR をさせていただきますと，芸術とか文化というものは，もちろん学術，研究等もそうでございますが，一人ひとりの国民あるいは一人ひとりの芸術家とか研究者とか専門家の方が主体であって，行政とか政策の役割というのは，あくまでその条件整備というか，そういった活動ができるだけ豊かに円滑に行えるようにという基盤整備とか環境整備であると思います．従いまして，特に芸術とか文化の場合は，個人や民間の活動で限りのあるところを補うといいますか，斜めから，側面から，あるいは縁の下の—力持ちと言えるかどうかわかりませんが，縁の下からの役割を果たすということであろうと思います．

かつてアンドレ・マルローが文化大臣をしておりました．ちょうどその時，私はフランスの日本大使館で文化担当の一等書記官を数年間しておりまして，マルローさんのおられた文化省へも，たびたび日本からのお客様や大使のお供をして行ったことがあります．アンドレ・マルローさんは，「国家というものは芸術を指導するために存在するのではない．芸術に奉仕するために存在するのだ」というたいへんすばらしい言葉を雑誌にお書きになったことがありますが，まさに文化政策のあるべき姿というのはマルローさんがおっしゃった一言に尽きると思っております．

文化庁も今，一生懸命頑張っておりますが，文化政策の大きな柱を挙げてみますと，一つは，主として専門的な芸術家の方々の芸術活動の奨励，援助といいますか，補助金を出したり，あるいは海外への研修に出かけて行っていただいたり，芸術祭を開催したり，いろいろな賞という形で顕彰を行ったりというのが大きな点であります．

それから第二番目の柱は，インフラストラクチャーと言いますか，産業のインフラストラクチャー，あるいは最近は情報のインフラストラクチャーということが言われておりますけれども，やはり文化にとってもインフラストラクチャーというのがあると思います．文化施設とか，文化の情報システムとかデータベースとか，関連したいろいろな制度がたくさんあると思いますが，そういう広い意味での文化のインフラの整備というものが大事だと思います．今，第二国立劇場の整備ということで，今年から本格的な建設を—だいたい平成5年の秋か6年の春ぐらいということですから，今から4年ぐらいかかる感じでございますけれども，我々はたいへん大きな，フランスのバスティーユに負けないいいものをということで，一番新しいハイテクを駆使したオペラハウスをつくろうと一生懸命やっております．

三番目は，国民の文化活動への参加の支援．言いかえれば地域における文化の振興ということで，芸術祭というのがどちらかと言えばプロフェッショナルの方の芸術の場であるとすれば，一般国民の文化活動の祭典として国民文化祭というのを毎年やってきております．

それから，四番目には，伝統的な文化財の保存と活用．最近，吉野ケ里などたいへん新聞で騒がれておりますが，文化財保護審議会からも，これを史跡として指定すべきであるという答申を近々受けたところです．

文化政策の柱の五番目は，文化の国際交流ということ

で，昨年はブラッセルでユーロパリアという大きな日本文化祭がありましたけれども，文化庁も国宝などを中心にして，大きな美術展を開催しました．

こういった文化政策を進める場合に，ちょうど学術に関するいろいろな施策を研究者の方々のご意見を十分いただきながら進めるのと同じように，芸術家や評論家の方，あるいは学者の方，経済界の方のご意見を十分いただきながら進めていくということで，文化政策推進会議というのを去年の8月につくり，今申し上げたような方々にお加わりいただいて，いろいろと議論を始めたところであります．21世紀を見据えて，1990年代の文化政策はどうあったらいいかということで，芸術創造小委員会，あるいは生活文化・地域文化委員会，そして国際文化委員会，とりあえず三つの小委員会をつくりまして議論を進めています．

ちょうどこの3月の末に，芸術文化振興基金というのができあがりました．新聞でもいろいろ話題になりましたので，ご存じの方が多いかと思います．今，日本の文化庁の予算というのは409億で，新年度，もし通過すれば432億という数字でございます．フランスがだいたい2000億，イギリスが1000億，イタリアが2000億—これは芸術文化の振興と文化財保護と両方合わせてですが，日本の場合，両方合わせて400億ちょっとで，非常にその数字が小さいわけです．

そういうわけで，特に芸術文化，もちろん伝統文化も含んでですが，芸術文化の振興という点で思い切って財政的な支援を強化する必要があるということで，基金構想が昨年の夏ぐらいから急に大きくなりまして，やっと国会で補正予算も通り，関係の法案も通って，この30日に芸術文化振興基金500億というのができあがりました．なお，これは民間の企業等からも100億以上の基金を出していただいて，両方で合わせて600億，その利息で運用するということでございますけれども，ともかく新しい芸術支援の芽ができたということでございます．

それだけでは日本の文化予算が非常に少ないと思われるので付け加えますが，地方公共団体は年間4100億ぐらい芸術文化に支出しております．そのうち文化財が645億，芸術文化振興が3500億近くで，かなり大きな金額を地方公共団体は出しております．それから民間が—これはなかなか計算が難しいんですけれども，800億ぐらいという計算を電通総研がいたしております．

国際比較をしてみますと，フランスなどは民間というのがまだ非常に少ない．地方公共団体は日本とどっこいどっこいか，日本のほうが多いかという感じがいたします．連邦制の国のアメリカとかドイツというのは，国の予算が300億とか200億程度の非常に少ない予算で，逆にアメリカあたりは，民間のコントリビューションというか，寄付が桁違いに多い．国によって構造が違うということではございますけれども，日本の場合，先ほど来申し上げております「文化の時代」というものにふさわしい，芸術文化に対する支援制度をつくろうということで，ようやく芸術文化振興基金が発足したという段階になっています．

日本における文化の時代というものの特色は，先ほどちょっと申し上げましたけれども，一人ひとりが，みんなが文化活動に参加してみたいというエネルギーといいますか，ダイナミズムが非常に強いような気がします．ヨーロッパの国に比べますと，はるかに日本の勢いは強いようで，カラオケの例ひとつとってもそうですけれども，あれだけみんながマイクを奪い合って歌う国というのは—韓国などには共通の現象があるかもしれませんけれども，非常に日本独特の現象であります．

例えば，「第九」ひとつをとりましても，日本で年末年始にかけて，多い時は170～180回，少ない時でも140回のコンサートがあって，世界で桁はずれに数が多く，しかも合唱団にはプロの人だけでなく，アマチュアの人が大勢歌われるという現象がある．これはある国の大使も非常にびっくりしておられました．カラオケのように「第九」をテープで練習するものまでできていて，これもその大使に見せましたら，たいへんびっくりして，「日本というのはすごい国だな」と言って笑っておられました．一人ひとりがやってみたいという勢いがものすごく強い国で，みんなが何らかの形で文化の主役になってみたいというエネルギーが日本では特に強いのではないかという感じがいたします．

そういう意味で，芸術文化の面では，必ずしも従来のようにアマチュアだプロフェッショナルだという境界が，しだいにグレーゾーンのようにはっきりしない所がかなり出てきている．その傾向は少しずつ増えているのではないかという感じがいたします．アルビン・トフラーさんが前に，プロデューサーとコンシューマーで「プロシューマー」という言葉を創り出しましたけれども，私ども，そういうのを見ていると，アマチュアとプロフェッショナルで「アマフェッショナル」という人が，だいぶ増えてきているのではないかという気がいたします．

先日も映画の会で，私はある人にお目にかかりました．その方が「植木さん，私のことを覚えていませんか．学術局長時代に何回かお目にかかったんですけど，覚えていませんか」と言うので，よく見ましたら，ある大学の偉い方なんです．その方はもともと自然科学系の，工学系の方ですが，同時に映画の評論家として別のペンネームでたいへん有名な方で，いわば2足のわらじを履いているというか，二つ顔を持っていらっしゃるということです．

私は，日本の今の，みんなが何らかの形で文化の主役になりたいという傾向を考えてみると，みんなが2足のわらじを—才能のある方は3足も4足も履けるんでしょ

うけれども，少なくとも2足を履きたいという時代になりつつあるんじゃないかと思っております．私自身も本当は音楽をやりたかったんですけれども，才能が及ばず東工大の講堂で歌ったぐらいで終わってしまいました．本当はもうちょっと社会的な条件がよければ，1.5足ぐらいまではいったかもしれません．これからは，先ほど申し上げたような，いろいろな条件がよくなってくれば，かなりの人が2足のわらじを履けるような時代になれるのではないかと思っています．

私は「人生複線化」ということを考えております．ある一つのビジネスにしろ，ここにいらっしゃる先生方は研究者とかそういう方ですから，それ自体に自分の人生を全部かけていらっしゃるという，恵まれた方々かもしれませんけれども，必ずしもそうでないといった場合に，もう一つ人生が欲しい，このままでは死にきれないからもう一つ欲しいという場合に，人生を複線化する．そして，もう片方の，従来は趣味と言われていたものももう一つの人生として，本来の仕事のほうにもいい意味でクリエイティブなリターンがあるという関係になっていくとたいへんおもしろいのではないかと思います．

大田区民オペラというのがときどき新聞に出ます．私がちょっと冒頭に申し上げました，東工大で歌を歌ったときに習っていた先生は宮本良平先生といって，長原に住んでおられて，もうお亡くなりになってしまいましたが，その先生は藤原歌劇団のオペラのバリトン歌手でもありました．当時，『カルメン』の闘牛士の役とか，あるいは『椿姫』のジェルモンというお父さんの役とか，さらには『タンホイザー』の役などをして，藤原歌劇団の中ではスターのバリトンの歌手でありました．その後，そのお弟子さんたちが中心になって大田区民オペラというのをつくっておりました．いつかも新聞に「大田区民オペラ」の記事と，写真が出ておりました．そうしたら，ちょうど私と一緒に習っていたお弟子さんの一人が闘牛士の格好をしてそこに載っていました．工学系を出て，本職は今，某自動車会社の重役をやっておりますけれども，彼の場合はプロになってもおかしくないくらい非常にいい声だったんで，歌のほうを捨てきれないで，ずっと歌を歌い続けて今日までできた．まさに2足のわらじを履いてそれぞれがうまくいっているということです．「アマフェッショナル」と言うと，彼は，「おれはプロだぞ」と言うかもしれませんが，アマフェッショナルの最たるものであろうと思います．そういう人がこれからはどんどん出てくるのではないかと思っております．

従来ですと2足のわらじと言うと，本職をおろそかにしているという感じがありましたけれども，これからはそうじゃなくて，二つを持つことによってお互いにフィードバックがあってプラスになるという時代になるのではないか．そう考えますと，そういうことによって人生を倍増することができるのではないか．所得倍増計画というのがありましたけれども，「人生倍増計画」なんていうのがそろそろ—余り個々の人生に行政や政策が介入するのは，もちろんなすべきではありませんけれども，もっと社会的な広い意味で「人生倍増計画」というのがあってもいいのかなという感じがしております．

要するに，みんなが花を開かせる．私もフランスにおりましたときに，フランスの文部省とか文化省へ行きますと，「エパヌイスマン—開花，花が開く」という言葉を非常によくキーワードに使っております．日本でももちろん使うことがありますけれども，もっと教育とか文化という点で「エパヌイスマン—花が開く，開花」という言葉を使ってもいいような，非常にラテン的なやわらかい，感覚的な感じがしますけれども，そういう意味で，文明開化の「化ける」という字を逆に今度は「花」という字にそろそろ切りかえて，「文明開花」になってもいいんじゃないかと思っています．

今申し上げたように，一人ひとりの人が非常に文化に熱心だということを地域として見ますと，各地域で非常に文化活動が盛んになってきているということで，ずいぶんいろいろな催しものが行われています．

例えば，金沢では，「オーケストラアンサンブル金沢」というのを県が肝いりでつくりまして，岩城宏之さんなどを迎えて，国際的にも募集して小型のオーケストラをつくっています．従来ですと，どうしても東京から文化が発信されるというのが，今言ったような形で，しだいに各地域からも文化が発信される．オーケストラアンサンブル金沢も東京でコンサートを開いたり，先ほど申し上げた，ブラッセルでのユーロパリアにも出かけていってコンサートを開いたりというように，文化の発信地が東京だけでなく，各地域もしだいにそういう力を持つようになってきたということは非常におもしろい現象だと思います．

ごく最近，水戸の芸術館というのがオープンいたしましたけれども，鈴木忠志さんという演出家などが総監督になりまして，「水戸を日本全体に対する文化の発信基地にしよう，さらには国際的にも発信基地にしよう」ということで，市のほうも全面的にバックアップしているという試みが出てきております．

そのほか，富山県の山の中の利賀村というところでも，国際演劇祭をやると世界の人が集まるということで，むしろ日本の人よりも外国の演劇関係の人のほうが利賀村のことをよく知っているということも出てきております．

それから，北海道に五稜郭がありますけれども，夏にあの五稜郭で，フランス人の神父さんが中心になって地域の方々が自分で地域の歴史的な物語のシナリオを書いて，町の人が総出で大きなページェントを繰り広げる．お医者さんが農民の役になったり，市役所の職員がいろいろな役になったりということで，みんながそれを1年

間楽しみにしているというもので，これも名物であります．

それから，私もおもしろいと思いましたのは，ユーロパリアのときに非常にベルギーの人は喜びました．ユーロパリアをやって，パリの人たちがみんなベルギーに殺到してきた．今まではベルギーの人がパリのほうへ出かけていって，オペラを見たり芝居を見たりしていたのが，ユーロパリアのときは逆に，みんなが今度は汽車に乗ったり車に乗ったりしてブラッセルへ押しかけてきて，流れが逆になった．ブラッセルのほうが今度は発信基地になったということで，非常にベルギーの人が喜んでおりました．

姫路市が市政100年のときに，姫路出身のケンゾーの大きなファッションショーをやりましたけれども，この時は今度，関西地区から姫路へ人がみんな逆に流れるという現象が起きました．そういうように，工夫の仕方によって，いろいろな地域が文化の発信基地になり得るという傾向が非常に強く出てきております．

そういう意味で，もちろん文化財を保存するということが文化庁のたいへん大きな仕事になっておりますが，文化財をうまく活用して，また文化を発信するというムーブメントがだんだん出てきた．吉野ケ里などもまさに一つの典型的な例であります．文化財を活用しながら地域を興し，その地域が日本中に向けて文化の発信基地になるということでございます．

さらに，文化の国際交流という点では，皆様方きょうは研究とか技術の方が圧倒的に多いわけですが，外国におりますと，日本の経済の顔，あるいは企業の顔，さらには非常にすぐれた日本の技術というものがよく知られるようになってきました．しかし同時に，「文化の顔」というものも知られないと，日本に対する理解というものがひずんでしまいます．文化の国際交流というのは文化庁だけではございませんで，外務省とかいろいろございますが，これからは積極的に日本の「文化の顔」を海外に発信しなければいけない．

そういう点では，ブラッセルでのユーロパリアなども，いい意味できっと大きなインパクトを与えたと思いますし，その前の年にはワシントンのナショナルギャラリーで大名展—日本の大名とか侍，武家の文武両道の「文」のほう，文化の面でいかにすぐれた文化を持っていたかという大きな展覧会をやって，30数万人の人が参りまして，たいへん大きな反響を呼びました．そういうように，積極的に日本の「文化の顔」も海外に表現するということが必要であろうかと思います．

時間がだんだん過ぎてきましたので，残念ながら余りしゃべる時間がないんですが，今日のテーマが「R＆DとArts and Culture」ということで，「何でR＆Dなんだろうか」というご疑問をお持ちかと思います．私，前に学術局長をやっておりましたので余計感ずるのかもしれませんが，日本の今後の社会全体の発展というのを考えた場合に，R＆Dがこれまで果たした役割というのは非常に大きなものがありますし，ますます大事だと思いますが，同時に，Arts and Cultureのほうを，私は思い切ってここで「A＆C」と—「芸術・文化」と言えばいいんですけれども，R＆DにあやかってA＆Cというふうに申し上げて，R＆Dだけでなく，A＆Cも大切だということをみんなにもっと知っていただくのがいいのではないかと思って，今日はそういうタイトルにしたのです．

研究者の方あるいは技術者の方が知性のフロントというものを必死になって開拓して，新しいものを見つけ，それが社会の非常に大きな共通の財産になって，我々が日常生活においてもたいへんな恩恵を受ける．また，開発され，研究された成果自身が，広い意味での文化的な資産として世界共通のものになっていくという点は，文化の面，芸術の面でも似たようなことが言えるのではないかと思います．芸術家というのは，どちらかと言えば感性のフロントを切り開いているパイオニアであって，これは学術研究，基礎研究などでは特にそうでしょうし，また技術の開発でもそうだと思いますが，非常に孤独と戦いながら新しい分野を切り開いていく．それが芸術の場合は，自然科学や学術研究ほど成果の評価というのがはっきりしない．最近の用語で言うと，たいへんなファジー—はっきりしない点がずいぶん違うかもしれませんけれども，ともかくそこで生まれた新しい成果というのは，それ自体が社会の文化であり，社会の共通財産であり，みんながその恩恵をこうむるということですから，もっともっと社会的にも応援をしていっていいのではないかと思います．そういう意味で芸術文化振興基金ができたのは，非常にまだまだ小さな芽ですけれども，画期的なことではないかと思っております．

R＆DとA＆Cの関係というのは，従来からいろんな本が出ていますし，ここで縷々申し上げるような必要もないんですけれども，常識的に言えることだけを拾ってみますと，音楽ひとつをとっても，非常に研究とか技術というものと密接な関係があります．

最近，テクノポップスという言葉があり，またそういうジャンル，音楽が非常に盛んになっていますけれども，それは最近の技術開発，テクノロジーの発展と音楽とが結びついて，非常に新しい表現ができるようになったということであります．シンセサイザーにしろ，コンピューターグラフィックスにしろ，レーザー光線にしろ，そういった技術開発，研究開発の成果がただちに芸術のほうにすぐ新しい表現力を与えてくれるという点では，A＆CのほうはR＆Dにずいぶん負っている所があります．

それから，R＆Dのおかげでメディアの技術がたいへんに発達をして，これは片や著作権の問題というたい

へん大きな問題が発生はしておりますけれども，同時に，そういったものが芸術文化の普及という点ではたいへん大きな役割を果たしています．

R & D と A & C の関係について，非常に感覚的におもしろいことを私は聞いたことがあります．よく日本にシャンソン歌手の人がフランスから参りますが，ジョルジュ・ムスタキという日本でも若い人に非常に人気のある方がおります．この方が日本に来た時テレビを見ておりましたら，インタビューで，「日本は，ハイテクに日本の魂を吹き込むことに成功した」という表現をしておりました．芸術家ですから非常に感覚的な表現ですが，私は非常におもしろいなあと思って，日本の魂というのは何だろうかと振り返ってみますと，日本刀に表現される—まさに日本鉄鋼協会はたたらの技術で日本刀を復元されたり，いろいろなご関係がありますが，そういう日本の伝統文化の持っているエッセンスといったものと日本のハイテクというのは，確かに何かつながっているんじゃないかと私は思っております．

たまたま，この間ジャンヌ・モローさんが一人芝居で日本に来ましたけれども，彼女もまた，「日本はハイテクに日本の伝統的な美しさと繊細さを吹き込んだ」と，ムスタキと同じようなことを言っておりました．何かその辺に日本が現代のハイテクの世界をリードしている大きな秘密があるのかもしれません．

私はたまたま R & D 担当から A & C になったもんですから，このタイトルに二つを掲げましたが，最近は企業の方々の中でも，「R & D だけでなく芸術，文化が大事だ」という大きな流れが出てきております．消費者のほうの性向が，単なる機能だけでなく，デザインとかそういうもののほうにだんだんトレンドが変わってきたことにもよるんでしょうけれども，企業自身のほうでもコーポレート・イメージとか，あるいはコーポレート・アイデンティティとか，さらにはコーポレート・カルチャー，そして最近はコーポレート・シチズンシップという言葉があります．これは頭文字だけだと，CI，CI，CC，CC で，企業もだんだんに CI，CI，から CC，CC へと文化のほうへ近づいてきている．それでないとこれからの企業というのは製品も売れないし，企業としても成り立たないし，そういう企業に新しい若い人たちを引きつけるということがなかなか難しくなる．いろんな意味で，企業は本当に文化というものにたいへん関心を持ち始めてきております．

私もいろんな社長さん方とお話する機会があります．これからの企業は R & D にますます力を入れなければいけないと思いますけれども，同時に A & C のほうも，私の立場からすると「お忘れなく」と．社長さん方は当然のことながら，「そちらにも力を入れないと，これからの経済なり企業というのもやっていけない」とおっしゃっております．なかなかおもしろい時代で，そういう意味では文化と経済といいますか，文化と技術といいますか，文化と経営というか，従来にない新しい関係の時代が来つつあるような気がいたします．

芸術だけがと言うと正しくないと思いますが，芸術というのは人間の持っているクリエイティビティの源泉のかなり主要なものではないかと思います．それがいろいろな形で研究にも技術開発にもつながっていると思いますし，教育の面でも個性を尊重するとか，創造性をもっとという場合に，やはり芸術的なものをもっともっと大事にしていかなければいけないと思います．

そういう意味で，よく「ホモ・サピエンス—知性人」という言葉がありますけれども，私は「ホモ・サピエンスに対応する感性の人，感性人という言葉があるんだろうか」とみんなに聞いたんですけれども，「どうもとっさに思い浮かばないな」ということでした．東京外国語大学の学長さんなどを煩わせまして，「何かホモ・サピエンスという言葉に対応する感性人ということをラテン語で表現したい」と聞きましたら，いろいろな方に聞いていただいて，「ホモ・センティエンス」—感性というか感情というんでしょうか，「ホモ・サピエンスに対してホモ・センティエンスという言葉はどうだろうか」ということでした．

私は，R & D と A & C，それからホモ・サピエンスとホモ・センティエンスという両方の均衡というものが，これからはますます大事になっていくのではないかなと思います．

よくハードウェア，ソフトウェアという言い方がありますけれども，そういう意味で考えていくと，やはりもうちょっと感性の側というものが，そういう時に一緒に上がってきていいんじゃないか．もちろんハードウェアでないものを全部ソフトウェアと言う言い方は非常に便利で，私どもも使わせていただいていますけれども，もうちょっときめ細かく，あえて「ウェア」と言うなら，例えば，ハード，ソフトときたら何て言うんでしょうか，「ファインウェア」という言い方もあるでしょう．芸術とかきめ細かい，もっと美しいというか，デリケートなという意味でファインという形容詞を使うこともできるでしょう．

もっとわかりやすく言えば心のウェア「ハートウェア」—ハードウェアと一字違いですけれども，意外と外国人に言いますと「ハートウェアというのはわかりやすい，ハード，ソフトにハートウェアという感じでわかるし，ヒューマンウェア，という言い方だと，ひょっとすると，人間を少し手段として考えてしまうきらいもあるのかな」と，その人の語感の問題でしょうけれども，あるイギリス人は言っていました．

そういうことで，ハードウェア，ソフトウェアだけでなく，ウェアと言うなら，ちょうど白と黒のテレビを見るだけでなく，カラフルなテレビをという意味でもっと

ウェアを増やしていって，そのバランスをどうとるかというのが大事ではないかという気もいたしております．

現在，環境問題というのが大きくなっておりますけれども，はて，この環境問題をウェアと言ったら何と表現するんだろうか．「バイオウェア」とでも言うんでしょうか．そうするとハード，ソフト，ハート，バイオとその辺の「文明の均衡」を今後うまくとっていけば，日本はもっともっといい社会になるのかなという気がいたします．

でも，そうやって見ていくと，アルビン・トフラーさんの話を先ほど出しましたけれども，農業型の社会というのは非常にバイオウェアが大事だった社会で，工業社会というのはハードウェアが非常に大事である．それから情報型の社会というのはソフトウェアが非常に大事な社会．これからの社会を仮に文化型の社会と言うと，それはまさにハートウェアの時代かと．もちろんそのウェアだけが大事だということではなくて，ハードもソフトもそれぞれが大事で，そのバランスの問題だと思います．未来社会を描くときに，そういう一種の「文明の均衡」というものを，もっとみんなが意識していくことが社会全体の幸せにとって大事ではないかなという気がします．

今日は大勢のたいへんな研究者の方々を前に勝手な私論も含めて申し上げましたけれども，文化の側はどんなことを考えているのかということを察していただく一つのよすがとしてあえて申し上げました．

R＆Dだけでなく，A＆Cということも，どうぞ大いに大切にしていただきまして，それをきっかけに文化政策をもっとご支援いただく．これはたいへんなPRになってしまって，主催者のご趣旨に沿わなかったかもしれません．時間もだいぶ超過してしまいましたけれども，そういうことで，私のお話を終わらせていただきたいと思います．

どうも，ご清聴ありがとうございました．